

甲子園にふさわしい学校と証明できた

山田高ナイン

優勝には届かなかったけれどやり切った

光星ナイン

球児熱戦 変わらぬ輝き

特別な夏

15日間にわたって熱戦を繰り広げた夏季県高校野球大会。28日、青森市内で決勝が行われ、青森山田の優勝で幕を閉じた。新型コロナウイルスの影響で、夏の甲子園をはじめ大会が軒並み中止に追い込まれ、やりきれなさを味わった3年生たち。悔しさを晴らすと無観客の球場に大声を響かせ、走り、泣いた。「力を出し尽くした」「努力は無駄にならない」。決勝に残った各校の選手たちは、すがすがしかった。

（松田啓志）【本記1画】

試合後、ベンチ前に整列し悔し涙を流す八学光星ナイン



「本来あったはずの甲子園。そこにふさわしい学校が、青森山田と証明できた。校歌を歌い終わり、三塁スタンドへ駆け出した青森山田ナイン。1番打者として攻撃をけん引した川原田純平選手の顔には、重圧から解き放たれたような笑みが浮かんだ。

岩手県花巻市出身。幼い頃から甲子園を目指してきた。その目標が突然、消えた。「なぜ自分たちの代で。落ち込みは大きかった。それでも野球が好き」という自分の原点を見詰め直し、代替大会に気持ちを向けた。「次の東北大会を甲子園に置き換え、戦いたい」。神戸市出身の3番打者・平野時矢選手は、準決勝まで打率1割台と低迷。だがこの日は値千金の決勝弾を放った。「我慢強く使ってくれた（兜森崇朗）監督のお

かけ」と感謝した。「甲子園、あったらなあ」。思わず本音を漏らしたものの、「悔しい思いを東北大会にぶつけた」と力強かった。一方、敗れた八学光星には相手の校歌を聴き、目を赤くする選手もいた。その中で、東京都出身の中澤英明選手は背筋を伸ばし、じっと前を見詰めていた。

小さいときから甲子園が憧れ。父・英嗣さん（50）の車に乗って毎年、甲子園がある兵庫東西宮市に行くのが恒例だった。八学光星が出場した昨年春の選抜では、走者が出たら代打！という指があったものの出場は来なかった。夏はけが

で出場なし。「父を自分の力で甲子園に連れて行く」という思いを胸に1年間頑張ってきた。幼なじみで、同じ東京出身の主戦森本光汰朗投手とバッテリーを組んだ最後の英嗣さんは、息子にねぎらいの拍手を送った。「特別な夏」。優勝には

東奥日報社提供

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです